


  
森のちやれんがニュース
   
2026 夏

Newsletter vol.44



## 第27回企画テーマ展「全国樺太連盟資料展」を開催しました (2026年4月18日～6月14日)

北海道のすぐ北に位置する樺太は戦前期、日本領でした。敗戦後には、樺太に住む人びとの多くが住み慣れた街を離れ、新たな土地で生活を営むことになったのです。新生活の最中、引き揚げた人びとは、樺太に様々な想いを馳せていたことでしょう。彼らにより設立された全国樺太連盟は、2021年の解散に至るまで、資料を収集し、樺太の歴史を後世に伝えるための活動を続けてきました。

本展では、全国樺太連盟より稚内市および北海道博物館に移譲された資料8,910点のうち、約400点を展示しました。展示されていたのは資料だけでな

く、多くの人びとの想いが含まれていたのだと理解しています。もとの寄贈者の皆様、資料を収集した「全国樺太連盟」の方々、資料を整理し、本展を開催した稚内市と北海道博物館の学芸員たち、そんな多くの人びとの想いが結実した成果だと言えます。

資料一つ一つに込められた想いを読み解くために、章仕立ての展示構成になっていない点も特徴の一つでした。かつての樺太に暮らした人びとの生き生きとした暮らしぶりが眼前に浮かび上がってくる、そんな展示だったのでないでしょうか。

(学芸員 波田尚大)



### CONTENTS

- ② 博物館活動紹介  
博物館における空気質管理
- ③ 総合展示紹介・第1テーマ  
奇跡の化石 炭化木
- ④ 研究活動紹介  
館蔵資料を研究するということ  
—「ちやれんが古文書クラブ」の活動と研究—
- 解説案内スタッフレポート  
博物館の馬 集まれー!
- ⑥ トピックス  
北海道博物館開館から10年——  
「森のちやれんが10周年」事業を実施しました
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより  
「ほっかいどうアイヌ語アーカイブ」が  
新しくなりました
- ⑧ 活動ダイアリー  
2026年3月～2026年5月の記録

## 博物館活動紹介

## 博物館における空気質管理

高橋 佳久

博物館研究センター 学芸主査

## 博物館における空気質管理の重要性

北海道博物館では、現在19万件以上の博物館資料を所蔵しています。これらを長く保存・活用していくことは、当館の重要な使命の一つです。そのために、収蔵庫や展示室等の博物館資料が置かれている空間の空気環境をきれいに保つための工夫をしています。なぜこのようなことが必要かといいますと、図1に示すように、博物館資料は空気中の化学物質によってさまざまな悪影響を受けるためです。

当館の空調設備を含めた施設等の管理は、北海道立総合博物館条例に従って指定管理者（現在は北海道歴史文化財団）によって担われています。よって、空調運転中は収蔵庫や展示室内の空気環境は常にきれいな状態に保たれています。一方で、気を付けなければならないのは、一見安全そうに見える展示ケースの中なのです。そこで今回は、展示ケース内の空気質管理についてご紹介します。

## 空気質測定機器による現状把握

人が建物の中で快適に生活するためには、新鮮で清浄な空気環境を維持する必要があります。そのため、皆さんのご家庭でも、たとえば料理をする時には換気扇を回して室内の空気を入れ

化学物質	発生源	影響を受ける材質
アンモニア	コンクリート・水性塗料・微生物	油絵（亜麻仁油）の褐変、緑青（銅系緑色顔料）の青変
ギ酸・酢酸	ベニヤ・木材・接着剤	金属腐食、鉛丹（鉛系橙色顔料）変色
アルデヒド類	ベニヤ・メラミン	膠（日本産の接着剤）の硬化
オゾン	電気器具	有機物脆化
炭酸ガス	観覧者、微生物	高湿度下で鉛丹（鉛系橙色顔料）変色
含硫黄化合物	ゴムカーペット	銀の変色

 図1 文化財に悪影響を及ぼす化学物質の種類及び発生源と悪影響<sup>(1)</sup>

替えているのではないのでしょうか。多くの博物館資料にとって快適な空気環境は、人の場合とほとんど同じです。すなわち、通常の大気以外の化学物質が少なく、細かいゴミなどが浮遊していない状態です。

展示ケースを使うと、基本的には周囲の環境から受ける影響（たとえば湿度の急激な変化など）を小さくすることができますが、例外もあります。それは、密閉性の高いケースを用いる場合です。密閉されたケースの中は、ひとたび化学物質が発生すると、汚染濃度が高くなり、博物館資料に悪影響を与える可能性があります。特に、展示ケースの内側に貼るクロスの接着剤などからアルデヒド類が発生することが知られています<sup>(2)</sup>。

展示ケース内の化学物質の濃度は写真1に示すような機器で測定することができます。筆者は日常的にこれらの

測定機器を使って展示ケース内の空気環境を評価しています。

## 人の鼻は優秀な検出器!

空気質測定機器以外に、人の嗅覚によっても空気環境を評価することができます。なんと、「感知できる臭いについて化学物質用検出器と比較すると、約2桁も感度が高い」<sup>(3)</sup> そうです。

このように、測定機器と人の足や鼻をうまく使うことで、博物館内の空気環境を把握することに努めています（図2）。

- (1) 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所：文化財の保存環境，中央公論美術出版，p. 60, (2011)
- (2) 杉山智昭・山崎正彦：新規導入展示ケースにおけるアルデヒド類の放散について，北海道博物館研究紀要，4: 29-36, (2019)
- (3) 三浦定俊・佐野千絵・木川りか：文化財保存環境学 第2版，朝倉書店，p.77, (2016)



写真1 北川式ガス検知官とエアサンプラー



まずは現場によく足を  
運ぶことが大切



自分の鼻を使って空気  
の状態を探る

図2 博物館では人間の足と鼻が大活躍！

## 総合展示紹介・第1テーマ

## 奇跡の化石 炭化木

成田 敦史

北海道研究センター(自然系) 学芸主査

総合展示室第1テーマの最初のコーナー「大地のなりたち」に大きくて、真っ黒い柱(右の写真)が見えます。キャプションには「炭化木」とありますが、そもそもこれが何かおわかりでしょうか? どうやってできたものでしょうか?

これは立派な樹木の化石です。これは木炭ですか? というご質問をいただくこともあります。木炭は人工的に現代の木材を高温炭化させてつくるものです。この展示の炭化木は自然の営みの中で形成された立派な「化石」です。そもそも「化石」とは地質時代に生息した生物(古生物)の遺骸(骨や貝殻など)や、その生活の痕跡(足あと、巣穴、うんちなど)が地層中に埋もれて保存されたものを指します。必ずしもカチカチの石になっていなくとも化石なのです。

一般に、目安として約10,000年前より古いものが「化石」とされています。この展示の炭化木はこれまでの研究で約45,000年前と推定されており、立派な「化石」です。ちなみにこの炭化木はグイマツ *Larix gmelinii* (現代の北海道には自生していない針葉樹)のものと考えられています。

さて、この炭化木は奇跡の化石であることがおわかりでしょうか? 植物の場合、葉や果実が母体となった植物から分離して化石化することが多く、樹木の材(幹や枝のこ)もバラバラになって化石化して見つかることが多いです。ところが、この炭化木は生育していた当時の幹の構造がバラバラにならず、しかも地層中に根を張ったままの状態も見られていました(残念ながらこの展示では根を張っている様子まではお示しできていません)。このような直立状態の炭化木が北海道登別市で何本も見つかったそうです(発見の経緯は展示キャプションや細川・春日, 1986をご覧ください)。付近のクッタラ火山の噴火に伴い、約45,000年前当時の森林がまるごと火山噴出物中に生き埋めとなって化石化した「化石林」



(登別化石林) だったということです。つまり樹木が立ったままの森がそのまま化石になったという点で奇跡なのです! 一方で、当時の恐ろしい火山災害(火砕流)も物語っています。

本展示の炭化木から、この化石の貴重さや化石化の際に化石林を埋めるほどの火砕流(正確には軽石流)があったことを是非感じてみてください。きっと“ただの木炭っぽい黒い柱”とは違う見え方になるはずです。

※引用文献: 細川・春日, 1986.  
地学教育と科学運動, 15, p.14-23.



よく見ると年輪や材の構造も観察できる

## 研究活動紹介

# 館蔵資料を研究するということ

## —「ちゃれんが古文書クラブ」の活動と研究—

### 東 俊 佑

北海道研究センター（人文系）学芸主査



1976（昭和51）年、北海道札幌市生まれ。2003年より当館（旧北海道開拓記念館）学芸員。当館での担当分野は中・近世史（歴史）。写真は、十数年前に作った当館総合展示第1テーマ内の「蝦夷地の産物コレクション」のコーナーに疑問を持ちながら腕組みしているところ。

私はここ数年、「ちゃれんが古文書クラブ」での活動成果を『北海道博物館研究紀要』に「資料紹介」として掲載するという調査研究活動に参画しています。具体的には、当館所蔵の古文書（ここでは、毛筆のくずし字で書かれた江戸時代の文書資料という意味で用いています）を翻刻し、どんなことが書かれているのか、どういう意義のある史料なのかの解題を書くというものです。2026（令和8）年3月には、「北海道博物館所蔵の林梅家資料（五）」が『研究紀要』第11号に掲載されました。「ちゃれんが古文書クラブ」の5件目の研究成果です。

### 「ちゃれんが古文書クラブ」とは？

北海道博物館所蔵の文書資料を講読する集い——これが「ちゃれんが古文書クラブ」です。日本全国には、各地域に似たような学習サークルが存在し、古文書を読むのが好きな人たちが集まって皆で定期的に勉強会を開催する市民参加型活動が展開されています。基本的にはそれと同じです。ただ、一般のサークルは、同じメンバーが固定されがちで新規の参加者が入りづらいということがあります。そこで、このクラブでは、毎年度20名を新たに募集する形にすることで、メンバーの入れ替わりがゆるやかに行われるように配慮しています。定員20名のうち、だいたい5～6名は毎年度入

れ替わっています。

このクラブの活動は、新型コロナウイルス禍が少し落ち着いてきた2020（令和2）年からはじまりました。早いもので、今年度で7年目を迎えました。ちなみに、「ちゃれんが」とは北海道博物館の愛称「森のちゃれんが」からとったものです。

クラブ活動は4月から12月まで3週間おきに12回開催され、定期的に参加者が集まり、近年は当館所蔵の林梅家資料を講読しています。1月から3月までは毎週8回、くずし字を読むのがまったくはじめての方対象の「はじめての古文書講座」を開催しているので、そこで実力をつけた方が4月からクラブに参加するという流れを想定し、このようなスケジュール感で開催を継続しています。

このクラブでの私など学芸員サイドの役割は、「案内人」「世話人」です。「講師」ではありません。参加者が集って講読している最中の私たち学芸員は、ある意味「傍観者」とも言えます。私は、クラブで講読する対象古文書の翻刻文をあらかじめ作成し、クラブ当日、参加者が講読するやりとりを聞きながら、自分の翻刻文の字の間違いを修正する作業を主に行っています。たまに、参加者がいくら知恵を振り絞ってもどうしても読めない字が出てくることがあり、そんな時に私などに助けを求められたりもしますが、そんな時は大抵私も読めないことが多く、

あまり役に立ちません。

私は、博物館側の人間とは言え、参加者の一人としてクラブ活動に参加しています。私たち学芸員が行うことは、講読資料の選定、印刷、配布、会場準備等です。そして、出来上がった翻刻文を元に、年度末に『研究紀要』に「資料紹介」をまとめ、講読した資料の解題を執筆します。あくまでも調査研究活動の中心をなす講読・翻刻を行うのはクラブ参加者であり、学芸員サイドは記録者など裏方に徹するのです。

### 館蔵資料と向き合うために

なぜ、このようなやり方でクラブを運営しているのか。その理由は、いくつかあります。

私など学芸員が行う活動とは、博物館資料の収集・整理、調査研究、展示、教育普及です。林梅家資料は、江戸時代に蝦夷地でヨイチ場所の漁場経営を営んだ林家に伝わる古文書群で、場所請負制下のアイヌ社会の実態等を探ることができる第一級の史料です。2006（平成18）年に収集した際、これは一刻も早く公開しなければならぬと直感しました。近世蝦夷地に関する古文書がまとめて出てくること自体、めったにないことです。整理・目録刊行・企画展開催を3年で終えたのは、そういう使命感からでした。

さっさと整理して利用者に広く使ってもらおう。それが今の博物館の考え方です。かつては研究が終わってから資料を公開するという流れが主流でしたが、そんなことを言っているうちに、何十年経っても公開されない資料が生まれてしまう。その反省から、まず整理・公開を優先するというのが近年の考え方であり、学芸員としての最低限の役割は果たしたと思っています。

しかし整理と公開の後に残るのが、調査研究という本質的な仕事です。私は



北海道開拓記念館第149回テーマ展「近世蝦夷地のすがた—林家文書から見えるもの—」（2008年2月22日～3月30日開催）



2025（令和7）年度「ちやれんが古文書クラブ」講読資料  
『於福嶋村堀織部正様御取扱日記』（林家資料E39、153927）

ずっと引っ掛かっていたことがありました。学芸員は博物館資料の研究をするのが本務のはずなのに、他機関所蔵の資料ばかり研究して論文や研究ノートなどを書いている。自館の資料を疎かにしているのではないか、という後ろめたさです。私自身、学生・院生時代から継続しているサハリン（樺太）関係の研究を続けるうちに、林梅家資料の本格的な調査研究は後回しになってきました。“灯台下暗し、とはよく言ったもので、足元にある資料の研究がいちばん後回しになりやすい。館蔵資料を地道に研究し、その成果を『研究紀要』に残していく。当たり前のことのように、実はなかなかできていない。そしていつかは、自分が収集・整理した文書群を使って論文を書く。それが学芸員としてこの上ない喜びであるはずなのに……。

一方で、当館の教育普及活動のあり方への問題意識もありました。博物館の普及行事の多くは、学芸員が一方的に話し、参加者が聞くという構造です。学芸員が「講師役」として参加者に一方的に知識を伝達する。こうした活動は得てして一過性の事業になりがちです。学芸員が調査研究してわかった成果を利用者に還元する。企画展や講座・講演会などはまさにそうです。それは大事な活動ではあるけれども、それだけでいいのかという思いがずっとありました。参加者が主体的に博物館資料と向き合い、学芸員はその過程を支える。そういう地

面に根を張ったような継続的な活動こそが、本来の博物館活動のあり方ではないかと。博物館を継続的に利用してくれる固定的なファンを増やすこと——それが博物館の長期的な存在意義を支えるものになる。

博物館資料の研究は、学芸員の専売特許ではありません。利用者が資料と向き合い、自ら研究する。そのための場と資料を提供するのが博物館・学芸員の役割だと、私は思っています。

私が旧北海道開拓記念館に採用された初日の2003（平成15）年8月1日、当時の学芸部長からこんな言葉をもらいました。「オレが、私が、と自分が目立つ必要はない。博物館の主役はお客さん。博物館とお客さんをつなぐ役割が学芸員だ」と。23年前のこの言葉は、今でも私の心に深く刻み込まれています。私は学生などに博物館学を教える機会がある度に、「学芸員は博物館と利用者をつなぐエージェントである」「利用者主体の博物館」という言葉を意識的に伝えるようにしています。

「ちやれんが古文書クラブ」は、こうした思いを一つの形にしようとした活動です。クラブがある以上、私は毎回史料の翻刻文を準備しなければなりません。クラブの存在そのものが、館蔵資料の研究を着実に進めるための締切装置として機能しています。林梅家資料を読み、研究し、成果を『研究紀要』に残す主役は参加者です。学芸員はその過程を支



林家資料目録

える黒子に徹する。地味な活動ですが、自分が勤める博物館の所蔵資料を研究し、その成果を自館の『研究紀要』に残していく。それが学芸員の本務というものだと、私は思っています。

#### 【関係文献】

北海道開拓記念館編『近世蝦夷地のすがた—林家文書から見えるもの—（北海道開拓記念館第149回テーマ展豆本）』北海道開拓記念館、2008年  
北海道開拓記念館編『林家資料目録（北海道開拓記念館一括資料目録第38集）』北海道開拓記念館、2009年  
東俊佑・三浦泰之・ちやれんが古文書クラブ「北海道博物館所蔵の林梅家資料（一）—ヨイチ場所請負初期関係史料—」『北海道博物館研究紀要』第7号、2022年、ほか

## 解説案内スタッフレポート

 うち  
博物館の馬 集まれー

今年が午年ということで、はっけん広場でわら馬づくりをしました。細いわらを織っていくのは大人にも子供にも少し難しかったようです。脚になる部分を長めに切るとサラブレッド。短くするとドサンコになります(写真1)。

北海道では昔さまざまな場面で馬が活躍していました。そのため展示室にも今までに数頭の馬がおかれていました。懐かしいその馬たちを思い出して

みます。まず1971年から1992年に展示されていた「どさんこ」です。(写真2)よくお客さんたちになでられたり、一緒に写真に収まったりしていました。2頭目は1992年から2015年まで展示された木材搬出を担った馬です。迫力ある光景だったため、うわー！と目を見張る人が多くいました(写真3)。

最後の馬は1971年の開館当初からずっと展示室にいる農耕馬です(写真

4)。旧展示のときは音声が流れていて「バイキ、バイキ(バック、後退の意)」と掛け声をかけられていたため、私たちはバイキくんと呼んでいました。昔おじいさんが飼っていた、ウチにもいた、といちばん懐かしまれている馬です。今度展示室にいらしたときは、探してみてくださいね。

福島奈緒子

事業部 教育・広報課 解説員



写真1



写真2

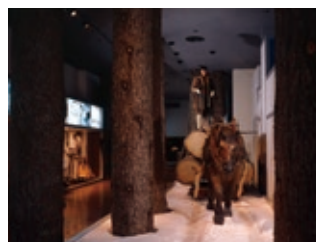


写真3



写真4

## トピックス

## 北海道博物館開館から10年——「森のちゃれんが10周年」事業を実施しました

当館が北海道博物館として初めてお客様をお迎えしたのは、2015年4月18日(土)のこと。昨年度(2025年度)、お陰様で開館10周年を迎えることができました。

この機会に、「森のちゃれんが10周年」事業として、これまでの10年間を振り返るとともに、改めて当館を知っていただき、博物館の役割や魅力を伝えるため、いくつかの事業を実施しました。

## ■10年間をふりかえる

「北海道博物館10年間の歩み」と題して、10年間の特別展のポスター展示

や、企画テーマ展・蔵出し展のポスター展示、関連映像の上映などを行いました。

また、北海道博物館の開館準備から10年間の歩みを15分程度にまとめた映像を作成し、2026年2月22日(日)のスペシャルトークイベントで初披露、その後3月末まで1Fグランドホールのモニターで上映しました。

## ■より知っていただく／これからを担う世代に届ける

10周年を記念した広告や特別展・企画テーマ展の広告を、この年度の夏から冬にかけて、地域のコミュニティ

ペーパー『まんまる新聞』に掲載させていただいたほか、2月22日(日)に開館10周年記念スペシャルトークイベントを開催しました。

イベントでは、世界の恐竜研究の第一線を担っておられる北海道大学総合博物館の小林快次教授を講師にお招きし、研究の最前線や博物館の魅力を語っていただきました。また、当館の各研究分野による博物館資料のハンズオン展示を行いました。お陰様で小林先生の講演は満員御礼となり、この日は夕方閉館まぎわまで多くの皆様にご来館いただきました。



◀「森のちゃれんが10年間の歩み」映像より(開館初日の朝のようです。多くのお客様に来館いただきました。)


 小林快次先生による▶  
スペシャルトーク

## アイヌ民族文化研究センターだより

## 「ほっかいどうアイヌ語アーカイブ」が新しくなりました

吉川 佳見  
アイヌ民族文化研究センター・研究主査

当館の前身の一つである旧北海道立アイヌ民族文化研究センターは、所蔵する貴重なアイヌ語の物語や歌などの録音記録を整理・保存し、ひろく公開する取組みを続けてきました。その一環として、2012(平成24)年度、インターネット上で録音記録を検索し、利用することができる「ほっかいどうアイヌ語アーカイブ」を開設し、これまで運用してきました。

そしてこのたび、このアーカイブがさらに使いやすいものになるよう、ページ構成や検索機能の見直しを行い、リニューアルを行いました。

画面の上には、検索のキーワードを入れるフォームがありますが、「いきなり資料を『検索』と言われても、どんなキーワードを入れていいかわからない…」という方は、その下の「たとえばこんな資料があります」というコーナーから、資料の一例をクリックして閲覧してみましよう。さらにその下の「人から探す」「マップから探す」のコーナーからは、人物別、地域別に資料を見ることができます。

一部の資料については、このアーカイブ上でも音声を公開しています。検索のキーワードを入れるフォームの右にある、[音声あり]のところにはチェック☑を入れて[検索]を押すと、音声をページ上で再生できる資料の一覧が出てきます。

詳しい使い方については、トップページ右上にあるリンクから「利用の手引き」を開いて、ご覧ください。また、このアーカイブ上に音声を掲載していない資料は、当館図書室で音声を聴くことができます。

今後も資料整理・公開を進めるとともに、よりアーカイブの利便性を高めていきたいと考えています。

ほっかいどうアイヌ語アーカイブ

北海道博物館が所蔵するアイヌ語録音資料を検索

利用の手引き

たとえばこんな資料があります

- 平取町の伝承 4 (資料番号:CC800001)
- 私の歩み:黒川セツ 1(その1) (資料番号:CC800002)
- カムイノミ:八重九郎氏 (資料番号:TC800026-02)

すべての資料を見る

人から探す

- アイヌ語やアイヌ文化、自らの生活などについて語った人びと
- 資料を収集した人びと

アイヌ民族文化研究センターの公開資料は北海道博物館図書室で閲覧・複製が可能です。

北海道博物館図書室

マップから探す

公開している資料を、採録地域ごとに分類したものです。(採録者の出身地や生活圏、方言区分、資料のなかに話者が話している地域などとは一致しない場合がありますのでご注意ください。)

サハリン(樺太) 道北 道東 道南 道央 道庁 その他の地域

お知らせ

- 2026/2/26 ほっかいどうアイヌ語アーカイブをリニューアルし、公開しました。
- 2022/3/31 Adobe Flash Playerのサポート終了等により休止していた、ほっかいどうアイヌ語アーカイブでの音声の再生を再開しました。
- 2012/7/11 「ほっかいどうアイヌ語アーカイブ」公開

北海道博物館 HOKKAIDO MUSEUM

© 2025 Hokkaido Museum.

ほっかいどうアイヌ語アーカイブトップ画面

ほっかいどうアイヌ語アーカイブ ▶  
https://ainugo.hm.pref.hokkaido.lg.jp/

**活動ダイアリー**
**2026年3月～2026年5月の記録**

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。  
 ※教育普及活動の担当あるいは講師で、所属の記載が無い者は当館職員です。

- 3月1日(日)  
 ■連続講座「学び直しの易しい地学講座(全4回)第4回」を開催。担当:成田敦史
- 3月7日(土)  
 ■古文書講座「はじめての古文書講座(全8回)第7回」を開催。担当:三浦泰之
- 3月8日(日)  
 ■特別イベント「クマゲラー斉調査2026」を開催。講師:水島未記
- 3月14日(土)  
 ■古文書講座「はじめての古文書講座(全8回)第8回」を開催。担当:三浦泰之
- 3月15日(日)  
 ■ミュージアムカレッジ「吉田初三郎のまなざしを建築・まちなみからひも解く」を開催。担当:鈴木明世
- 3月22日(日)  
 ■第26回企画テーマ展「吉田初三郎が描いた北海道」閉会。
- 3月28日(土)  
 ■子どもワークショップ「ヒツジの毛にふれてみよう③ フェルトの雪だるまストラップ(同日2回開催)」を開催。担当:会田理人・谷口生貴斗【写真1】
- 4月3日(金)  
 ■北海道博物館研究紀要第11号、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要第11号、\* PDFデータを当館ウェブサイトにて公開。
- 4月4日(土)  
 ■はっけんイベント「ふわふわ羊毛でシマエナガのマグネットを作ろう」を開催(5月31日(日)までの土・日・祝・振)。  
 ■ワークショップ「北海道の稲わらでわら馬を作ってみよう」を開催。担当:谷口生貴斗・波田尚大・山際秀紀【写真2】
- 4月10日(金)  
 ■総合展示室 クローズアップ展示②～⑦を展示入替(②・⑤は6月11日(木)、その他は8月6日(木)まで)。  
 ①恐竜時代の地層を貫く岩ランプロファイアー  
 ②考古一括資料紹介-熊野コレクション①-  
 ③佐賀藩土島義勇と幕末の志士松浦武四郎  
 ④アイヌ語で楽しむ野幌森林公園の植物(2)  
 ⑤新しく仲間入りしたアイヌ民族に関する資料たち  
 ⑥北海道の民俗芸能-収集された神楽面から-  
 ⑦たくぎん(北海道拓殖銀行)  
 ⑦野幌森林公園の植物を調べる2
- 4月11日(土)  
 ■自然観察会「エゾアカガエルのラブコールを聴こう!」を開催。担当:水島未記・表深太・堀繁久、自然ふれあい交流館スタッフ【写真3】

- 4月18日(土)  
 ■第27回企画テーマ展「全国樺太連盟資料展」を開催(6月14日(日)まで)。
- 4月25日(土)  
 ■講演会「民俗学者・宮本常一、昭和20年の北海道を歩く」を開催。担当:谷口生貴斗  
 ■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)第1回」を開催。担当:三浦泰之・東俊佑
- 4月29日(木・祝)  
 ■ミュージアムトーク「第27回企画テーマ展「全国樺太連盟資料展」の展示の見どころ」を開催。担当:石子智康  
 ■屋上スカイビュー特別開放を開催。
- 5月2日(土)  
 ■講演会「先祖を通してみる樺太・戦後北海道」を開催。担当:石子智康【写真4】
- 5月3日(日・祝)～6日(水・祝)  
 ■屋上スカイビュー特別開放を開催。
- 5月3日(日・祝)  
 ■ミュージアムトーク「第27回企画テーマ展「全国樺太連盟資料展」の展示の見どころ」を開催。担当:三浦泰之
- 5月4日(月・祝)  
 ■ミュージアムトーク「第27回企画テーマ展「全国樺太連盟資料展」の展示の見どころ」を開催。担当:小川正人
- 5月5日(火・祝)  
 ■ミュージアムトーク「第27回企画テーマ展「全国樺太連盟資料展」の展示の見どころ」を開催。担当:尾曲香織
- 5月6日(水・祝)  
 ■ミュージアムトーク「第27回企画テーマ展「全国樺太連盟資料展」の展示の見どころ」を開催。担当:鈴木あすみ
- 5月9日(土)  
 ■アイヌ語講座「アイヌ語講座～きほんのキ～(全4回)第1回」を開催。担当:吉川佳見
- 5月16日(土)  
 ■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)第2回」を開催。担当:三浦泰之・東俊佑
- 5月17日(日)  
 ■講演会「引揚者文化とは何か-食文化から企業家精神まで」を開催。担当:島村恭則(関西学院大学社会学部長)
- 5月20日(水)  
 ■館内定例研究報告会を開催。発表者:各研究代表者
- 5月23日(土)  
 ■アイヌ語講座「アイヌ語講座～きほんのキ～(全4回)第2回」を開催。担当:吉川佳見



写真1



写真2



写真3



写真4

**人事異動**

( )は前職。

- 退職(3月31日付) 学芸部展示・資料課長兼北海道研究センター(人文系)副センター長) 会田理人  
 転出(3月31日付) (総務部総務課総務係主任) 熊谷那月  
 新任(4月1日付) 事業部教育・広報課教育普及係兼アイヌ民族文化研究センター学芸員: 葛野大喜  
 転入(4月1日付) 総務部総務課総務係主任: 徳本彩  
 内部異動(4月1日付)  
 学芸部展示・資料課長兼博物館研究センター主査(博物館): 櫻井万里子  
 学芸部展示・資料課資料情報係長兼北海道研究センター(自然系)学芸主査(地学): 圓谷昂史  
 学芸部展示・資料課兼博物館研究センター研究職員: 鈴木明世  
 総務部企画課兼博物館研究センター学芸員: 鈴木あすみ  
 事業部教育・広報課広報・利用促進係長兼博物館研究センター学芸主査(文化財): 高橋佳久  
 事業部教育・広報課広報・利用促進係兼北海道研究センター(人文系)学芸員: 波田尚大  
 事業部連携協働課兼総務部企画課兼アイヌ民族文化研究センター学芸員: 小川正人

**来館者数**

○2026年3月					
総合展示室	4,817人	特別展示室	4,313人	はっけん広場	944人
○2025年度合計					
総合展示室	70,179人	特別展示室	35,077人	はっけん広場	10,734人
○2026年4月～5月					
総合展示室	11,268人	特別展示室	7,455人	はっけん広場	2,151人
○累計(2015年4月～2026年5月)					
総合展示室	971,585人	特別展示室	656,819人	はっけん広場	147,678人

**森のちゃれんがニュース 第44号**

発行日: 2026年6月26日  
 編集・発行: 北海道博物館  
 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2  
 Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657  
 ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>  
 ©Hokkaido Museum, 2026